會報

1956年4月 | 185 | 日本山岳會

サマ部落の紛争

小原　勝郎

私達のキャラバンはローの部落まで順調に進んで来ました。私達がローにキャンプを張つた夕刻スッバの使者がキャンプに来てスッバはチョコンから私達を追及して来て今日ナムルーまで来ている、明日の午後はローに来られるから隊は待つていてもらい、そして一諸にサマのBCに入りたいとのことでしたので私達は一日ローで滞在してスッバの来るのを待つたのです。その他スッバの希望もあつて滞在の三月二十六日の午前中は今まで使用していたカトマンズポーター始めチベッタンポーターも全部解雇しローサマ間はスッバの手によつて新たに契約することになつておりました。その日の午後スッバ一行は到着し槙隊長始め隊員とも公式な挨拶の交換をした後、明日のサマ入りにつき相談を始めたところがその時既にサマ側からおかしな情報が入つてきていました。即ち私達のポーターはローとサマの境界線よりは入れないということでした。しかし約三九〇名によつて運ばれた荷物がサマの入口で完全にサマ側のポーターによつてバトンを引継げるかというとサマ部落側が繰出せるポーターの数はせいぜい七、八十名に過ぎぬことは分つた話です。結局このことは常々ローとサマの部落民の感情が悪く、ローのポーターへの邪魔であると解釈するほかありません。そこでスッバは次の案を出したのです。ローのポーターが真直ぐにBCまで行つた場合は六・五ルピー、もしサマとローとの境界線でサマ側のポーターに引続いだ場合はおのおの三ルピーと決めました。

かくして翌三月二十七月私達は最終のキャラバン・コースに入つたのです。私達はポーターの間に混りながら、サマへ入る峠へ登る森林帯に進んでいたとき七十名ほどのサマの連中がやつてきました。これらの連中は荷担ぎに来たのかとばかり思つていたところが、事実はスッバに日本隊のマナスル登山の中止方を陳情に来たもので、スッバの一喝にあい、すぐローとサマの境界線に立戻り、ここで暴力によつても日本隊を阻止する態度に豹変したのです。

こんなことはスッバ以外には知るよしもなく、私達キャラバンの行進は続きましたが、いよいよ峠にさしかかると前記のサマの若者達が頑張つていて通さない。スッバは通せといえば相手方から〝スッバを殺せ〟との声にさすがのスッバもそのボディ・ガードもいきり立ち、たちまち乱斗となつたのです。勿論その間隊員およびシェルパ、ローのポーターは傍観的立場にあつたのです。この乱斗で数名の負傷者も出ましたが、乱斗のすえスッバのチョコン・チベッタンはサマの主謀者二名を縛り上げてしまつたので他の連中は抵抗する気力なく、ただ主謀者の返還に頭をたれる始末で、この乱斗もスッバ側の勝利に帰しキャバランはサマ峠をこえ雪に蔽われた広場にまで進みました。

この広場の真中には大きなチョルテンがあつて、ここからサマ部落の入口になるところです。ここまで来ると、ローのポーターは一歩も動かなくなつてしまつたのです。乱斗を目撃した彼等はサマの連中からの復讐を恐れ、荷物を置いてローに引上げてしまつたのです。私達はやむを得ずここに天幕を張つて一泊し、明日からは隊員シェルパ、チョコンポーターの手だけでサマBCまで荷上げすることに決したのです。翌三月二十八日は残された荷をまずBCの下まで全員何回も往復して運び、その翌日の二十九日も同様の方法でBCに荷上げを終つたのです。

その間スッバとサマ部落民との間には沈黙が続けられましたが、三十日にサマのラマほか有力者が五、六名BCのスッバのもとに来て再び日本隊のマナスル登山を禁止してほしい旨申入れて来たのです。この際どうしても受入れることが出来ないのならばサマのゴンバへ一万ルピーの寄附をしてくれとの条件もそえて来たので、隊長は金銭でこの問題が片づくならば申入れに応ずることにし、額の問題で色々取引を行つた結果四千ルピー（邦貨約十八万円）に落着きました。勿論隊としてはリエゾンオフィサーを通じ、マナスルはサマの所有物ではなく、ネパールのものである、日本隊はネパールからの登山許可証を持つていると説きましたが、彼等には何の役にも立ちませんでした。

色々の問題が次から次へと起りはしましたが、眼前に青空高く聳えるマナスルの双峰を眺めるとすべてが洗い流されるような気持になれるのは有難いことでした。

サマとの問題も四月一日四千ルピーの支払と同時に交された「今後何らの防害をせず」との契約書に調印することによつて終幕となり、今の私達の心は専心登頂へとそれのみ考えております。BCの整理を行いつつC1への荷あげも開始しました。マナスルは連日天候もよく氷河の状態も落付いている模様です。槙隊長はじめ隊員一同元気でおりますからご安心下さい。（四月二日ベースキャンプにて）

追記　競輪の千五百万円の件は結局どうなりましたか、やつぱり何をするにしても、先立つものは金なのですから、金があるものならとに角、ないのですから使えるものなら、使つた方がよいのではないかと思つております。

変に格式張つたところで結局は方々に頭を下げねばならないのではありませんか。どうか受取れるようにしていただけませんか。

さて私のアルガト・バザールからBCまでの報告はすつかり不勉強になつてしまつて申訳ありません。二度目でもあるのですらすらとキャバランは進んで来たのです。ただローからサマへの事件のみ取上げてご報告いたしました。

（成瀬氏あて）

× × ×

× × ×

サマへの行進

松田　雄一

去る三月十一日カトマンズを出発した四三〇人からなるキャラバンの一隊は十五日ここアルガト・バザールに到着、明日からのブリガンダキ入りにそなえて全員楽しい休養をとっている。カトマンズでは当初の方針通りすべては順調には参りませんでした。ポーターの雇用にしてみても、ポスト・ランナーの問題にしても一九五二年以来の慣習を打破することはなかなか困難でした。しかしこの点についても可能な範囲において登山隊がイニシアイティブをとるようにつとめたつもりです。

カトマンズでは二つの大きな問題がありました。その一つは例の印度地質所員ブリン氏同道の件でした。アプリケーションの出し方が問題となったわけでしたが、これも最近のネパールの国粋主義による反印運動のあらわれの一つでしょう。しかしこの問題もカトマンズ印度大使の陳謝文によってケリがついたような次第です。もう一つの問題はシェルパの中の一人パサン・プタールの参加の件でした。彼は一九五五年、ローツェ・ディーレンフルト隊のサーダーをつとめ、今回はローカル・ポーター・サーダーとしてギャルツェンがつれて来たのですが、ローツェ隊のリエゾン・オフィサーが彼は芳しからずというレポートを出し、しかも彼が強引に参加拒否を陳情したことによるのですが、これは単に彼とリエゾン・オフィサーの感情問題によるだけで、パサン・プタールはなかなか有能ぶりを発揮しています。

この一つの理由は最近ダージリンのシェルパ・クライマース・アソシエーションに対抗してネパール・マウンテニアリング・クラブを作ろうという運動がおきて、ヒマラヤ登山の主導権を取りたい運動のためです。この主力は各国の隊に参加しているリエゾン・オフィサーが中心となり、観光国ネパールのために活躍しているわけです。しかし彼等には何のフォウンデーションもなく、今後の運営法が相当問題でしょう。槙さんも彼等にツーリスト・インダストリーの主要性を説いて政府の援助をあおぐようにアドヴァイスされたが、全くその通りです。

現在のようにシェルパ・アソシエーションに対抗するような気持を捨て、シェルパと協力して行つたら将来ヒマラヤ登山はどれだけ入り易くもなり、一般化することでしよう。将来日本からのスモール・エクスペジションがこのクラブへ申込むだけで、彼等が入国の問題を面倒みてくれるならばやがては各大学単位くらいでエクスペジションの出せる日も来ることと思います。ご承知のように、小原さんは一人でエヴァレット号の荷物輸送のために残留したわけですが小原さんの留守の間に種々な問題がおきたわけです。槙さんとしては信頼出来る小原さんを心待ちしていたことでしよう。小原さんカトマンズ着後は小原さんのアドヴァイスによつてトントン拍子にことが解決されてゆきました。ネパールの対印感情とか、その他ネパール人の感情を判断するにはやはり小原さんが必要だつたのでしよう。少々あせり気味の槙さんの気持も、それ以来大いにやわらいだようです。何といつても小原さんの参加は大成功だつたといえましよう。

種々な問題が起りましたが、七日には小原さんが到着し、十日には出発準備完了、ただし十日は土曜日なので例によつて出発不能。十一日槙さんの希望通り全員一隊として出発することが出来ました。今度の隊は一昨年と違つてギャルツェンの統率力宜しく、整然としてキャラバンは続けられております。憂鬱なカトマンズの日々と較べ、それはまた何と楽しい日日でしようか。

ここで一言シェルパについて書きましよう。サーダーについては先遣隊の報告通りファースト・クラスのサーダーでしよう。シプトンと長年生活していただけに礼儀は極めて正しく、若いシェルパの信頼は非常なものです。キャラバンに出てからも途中随分種々な話をしました。アピの話。――しかし何といつても彼の最大の思い出はカシュガール時代のことでしよう。一昨日も共産党に取り囲まれて困つた話や、例のアンティートランドにある話など愉快そうに話してもらいました。彼は今回特に槙隊長の取計いでメンバーとしてわれわれの隊に加わることを許され大喜びです。シェルパにとつてこれほど名誉なことはないでしよう。ヘンダーソン夫人がカルカッタで槙さんに語つたところでも、彼はどうしても今年はマナスルの頂に立ちたいようでした。

彼についてアシスタント・サーダーをつとめているのがギャルツェンの兄でマッシャーブルムで指をなくしているパサン・プタールです。彼は昨年春はマカルー隊のローカル・ポーター・サーダーをつとめ、引続き秋には例のローツェへの国際登山隊のサーダーをつとめております。ローツェではリエゾン・オフィサーと多少トラブルをおこしておりますが、ギャルツェンの兄弟ということからみても極めて善良な人物です。四百人のポーターの統率も彼ならでは困難でしよう。キャラバンの編成は、

ローカル・ポーター・サーダー
①長アン・バウブ百名（赤組）
②長チョルタレイ百名（黄組）
③長アン・テンパ百名（青組）
④長イラ・ナムギャル九十六名（緑組）

④班のみカトマンズ、BC間で使用し①～③はノー・オープンです。この他グンディン・イラ・ナムギャル、トライについては先遣隊使用ずみの通りです。

コックはサーダーの話によると成瀬さんがパンシイ、サルキ、ニマ・テンシンの三人をキャンセルサンズがエヴェレストに行つてしまつたので止むを得ず若いラクパ・テンジンを思い切つて使用したいといつておりましたが、これは一つの成功のようです。若いだけに研究心もあり。なかなか熱心です。それにセカンド・コックのラクパ・ステリンはハーゲン博士のプライベート・コックをつとめただけに清潔だし、料理もこつたものを作ります。ションデイ博士宅でハーゲンのスライドを見せてもらつたときもイラと並んでラクパがいたことを知つていましたが、彼だとは知りませんでしたが――その他当方から申込んだサウス・コルシェルパのダワ・タンダップ、パサン・ダワ、アンナムギャル、ペンバサンダル、チョウンも来ております。ダワ・タンダップは私のプライベート・シェルパです。ヒマラヤでは最も経験の深いシェルパの一人です。例のシェルパのリストを見ればわかると思いますが最近の大きなエクスペジションには大てい参加しております。これから先が楽しみです。チョウンはアメリカのG・ベル博士推選のシェルパだけに良く働きます。これはベルに会つたための拾いものといえましよう。小原さんのプライベート・シェルパです。

ヘンダーソン夫人推選のニマ・ペンギン、依田さん附を五四年につとめたサルキII、五〇年のアンナプルナ以来のベテランのアン・ダワIV、戦前のエヴェレストを経験しているアン・バグ、若くて強いチョウタレイ、サーダーの話ではマカルーで最も強かつたというそれにニンプタール、ウァンデ、新人ながらペンバスンダーの弟のアン・テンバと一応揃つております。当初申込んだものの中ラクパ・ゲルブ、タンドウ・ダ・ノルブはエヴェレスト、アン・ノルブ、アン・ツエリンIV、アンナルはダージリンにおらず、ソラクーンブにいるため参加不能、エヴェレス

トに行くだろう。ウルキンは病気のため不参、アン・テンバⅢはヒマラヤン・スクール、アン・ニマⅡはロバーツ少佐のプライベート・サーヴァントのため参加不能、ダ・ノルブは素行不良のためサーダーが断つた、とそれぞれの理由のためにわれわれの隊に来ませんでしたが、アルゼンチンのダウラギリ隊の如きは二十名申込んだにかかわらず九人しか参加していない現状からみてもまあまあというところでしょう。

キャラバンに出てからは、隊員の多くが経験者だけに極めてスムースです。私も二度目だけにそれ程の驚きも感激もなく、雪の山を夢見て足取りも軽く歩いていると いつた格好です。槙さんも最初の一日、二日は少々ロングな行程のため遅れ勝でしたが、日増しにコンディションも良好となりたいした張り切りかたです。私もすつかり安心しているところです。

一昨年は六日かかつたこの道を今年は五日で歩きました。そしてここアルガト・バザールのマンゴー・ガーデンにキャンプしているところです。

たしか一昨年もこのマンゴーの樹の下で皆の合唱するワンダー・リードを聞きながら秩父の山を、大島さんなどの一行を想い出しながら筆をとつたことをおもい出しました。今あの時を想い出して感無量です。時の流れを感じたり驚ろいたりしているわけではありません。皆の気分の違い方に感じているのです。今年の隊は槙隊長のもとチーム・ワークは完全です。このチーム・ワークでマナスルへぶつつかれる日を楽しみにしております。ご心配いただきました予算の方もどうにか余裕を残してやつてゆけそうですからご安心下さい。スッパも現にジャガードまで来ているというニュースが今日ジャガードから来たチベッタンから聞きました。

例によつて筆不精のために皆様方に大変失礼しておりますが、よろしくお伝え下さい。（三月十六日、アルガト・バザールにて、成瀬氏あて）

順調に登高進む

第三次マナスル登山隊

第三次マナスル登山隊は去る四月一日から予定通りマナスル頂上を目指して登頂を開始し、十二日には早くも標高五六〇〇米のナイケコルに第三キャンプを建設、つづいてアイス・フォールの突破に移りカトマンズに達した槙隊長からの通報によると十九日六二五〇米の地点に第四キャンプの建設に成功、登攀は順調に進んでいる模様である。

一行はさらにアイス・フォール上部を突破して標高六六〇〇米に第五キャンプ、ノース・コル（七一〇〇米）に第六キャンプを設ける予定である。

第一回頂上攻撃は五月十五日と予定されており、六月上旬まで前後三回アタックを行う。

なお登山隊あての通信は郵便物宛名は Mr, Krishna Bahadur Verma, Kamal Pokhari, Pilli Bazar, Kathmandu, Nepal. で電報宛名は Mainichi Kathmandu である。

ネパール戴冠式に祝電

五月二日ネパールの首都カトマンズで行われた同国王子の戴冠式を祝し、本会より次の祝電を発した。

Please couvey His majesty our heartiest congratulation for his coronation. J.A.C.

今年のウェストン祭

恒例のウェストン祭は六月下旬上高地で開催されるが、今年は国体登山が中止となつたため、それに代るものとして盛大な行事が予定されている。従来信濃支部の主催であつたが、本部および信濃支部の共催とし、山行も常念や、蝶ケ岳などへの懇親山行だけでなく、今年はその内容を充実させ、穂高で三パーティくらいにわけた技術講習会を行う予定で、またウェストン祭前夜祭としてその前日松本市内で山岳写真展、スライド公開、講演会なども計画されており、多数会員諸氏の参加が望まれている。

なお日程、行事など正式に決定次第発表される。

陛下にカラコラム報告

カラコラム科学探検団長木原均同支隊長今西錦司両氏は四月十七日皇居で天皇陛下、皇太子さま、義宮さまに約二時間探検の模様を報告された。

関口泰氏 もと本会々員、朝日新聞社論説顧問、憂うつ症のため療養中のところ四月十四日鎌倉市山ノ内一四一五の自宅で死去。六十七才。

会務報告

三月役員総会　十四日（水）

場所　本会図書室

出席者　別宮会長　日高副会長　理事入沢、成瀬、沼倉、渡辺、金坂、折井、評議員沼井、岩永、神谷、村井、三井（山梨支部）監事石原、委員初見、太田、山崎

議事

一、新年度役員推選の件、①理事候補者の推選は現常務理事に一任し会長、副会長に相談して決定する。②現監事の任期が三十年度で満了となるので評議員会に二名推選願う。

二、終身会員取扱の件、主として本会の財政的見地から役員会において取上げられた問題であるが、既得権者は現在二十五名で、そのうち約半数の方からは毎年通常会員と同額の年度費を寄附して貰つている。これは不成文のまゝ当分は続けて貰いたいが、今後新しく終身会員となる者については一時金を少くとも五万円程度にしたい。なお長年在籍して功労ある長老の待遇については何らかの方法を講じたい。

三、津軽書記辞任に伴う後任の件三月をもつて津軽書記が辞任することになつたので、後任者として北河原景寿氏（バスケットボール協会勤務）を適格者として採用することに決定した。

報告

一、山形山岳連盟主催氷雪技術講習会の件（金坂）

二月二十四日から四日間蔵王山で開催、講師として参加、参加者は約三十名でそのうち半数が高校生であつた。

二、山梨支部関係（三井支部長）

①遭難対策について県として警察署を主体とした山梨県山岳遭難救助対策本部が設置された。

②支部関係の会員につき、会費徴収がなかなか困難であるが、未納付者は整理することにした。

三、登山全書出版の件（渡辺）

河出書房から高校生を対象とした登山全書（全六巻、編集者川崎隆章氏）出版につき、これを日本山岳会監修とされたい旨申入れあり、先般常務理事会の承認を得たので内容執筆者を検討の上監修を許可することにした

四、月例会計報告（沼倉）

四月役員総会　十一日（水）

場所　本会図書室

出席者　別宮会長、日高副会長　理事沼倉、成瀬、金坂、入沢、渡辺、今村、交野、折井、委員太田、山崎、評議員藤木、沼井岩永、監事石原

議事および報告

一、昭和三十一年度通常会員総会附議事項の件。

二、昭和三十年度収支決算および三十一年度収支予算の件（沼倉）

三、山岳五十周年記念号の件、手もとにある原稿で六月一杯には出版するよう努力している。（交野）

通常会員総会

昭和三十一年度通常会員総会は

四月二十一日（土）午後二時からお茶の水体育協会二階会議室で開催、日高会長を議長におしたのち日高会長から昨年度事業報告、沼倉理事から昨年度収支決算報告、本年度収支予算の附議可決。

各支部報告に移り、新潟支部（藤島）静岡支部（牧野）東京支部（鴨原）各支部の報告が行われた。

つづいて会長、副会長を除いて任期満了となつた理事、監事の改選を行い、小原勝郎、折井健一、山崎安治、太田敬、辰沼広吉、村山雅美、千谷壮之助、金坂一郎、村木庸益、山田二郎、松丸秀夫、大塚博美、徳久球雄、石坂昭二郎、羽鳥肇の十五名を本年度理事に、また評議員会の推挙により石原憲治、諸岡一次両氏を監事にそれぞれ決定。新理事は直ちに別室で理事会を開いて小原、太田、折井、金坂、辰沼の五氏を常務理事に選任した。

なお成瀬氏よりマナスル登山隊のサマの紛争について報告あり、終つて村山氏の撮影になる一九五五年マナスル偵察隊の記録映画を観賞した。

昭和卅年度収支決算

（31・3・31）

収入ノ部（単位円）

摘要	予算金額	決算金額
経常収入		
入会金	七五、〇〇〇	七七、六〇〇（百名）
会費	一六〇、〇〇〇	四九、〇〇〇（六七名）
地方会費	四三〇、〇〇〇	五六三、二五〇（一三〇名）
事業収益		五六、〇〇〇
会報広告料		六〇、〇〇〇
山岳広告料		一五、〇〇〇
山日記頒布		二〇〇、〇〇〇
国体交附金		五〇、〇〇〇
会員章売上		三、〇〇〇
山岳売上金		二五、〇〇〇
山日記手数料		五、〇〇〇
貸室料		三、〇〇〇
地図売上金		三四〇
雑収入		一〇、〇〇〇
遭難対策基金		七五、二二二
図書基金		三、〇〇〇
前年度繰越		二六、三五七
計		一四、九六〇
		二三八、五四四

支出ノ部（単位円）

摘要	予算金額	決算金額
事務費		
俸給手当	二六八、〇〇〇	二八一、八〇一
文具費	一三〇、〇〇〇	一五五、〇〇〇
印刷費	一〇、〇〇〇	八、八〇三
通信費	二五、〇〇〇	九、四六五
交通費	一〇〇、〇〇〇	一〇五、五〇
雑費	三、〇〇〇	七〇三
管理費	二〇、〇〇〇	二、二五〇
諸税	一〇一、〇〇〇	一二、一〇四
火災保険料	一〇、〇〇〇	五、六九〇
修繕管理費	七、四五〇	八、一〇〇
光熱費	一〇、〇〇〇	三、七三五
電話料	二五、〇〇〇	二、七八六
消耗費	三〇、〇〇〇	四四、三四五
雑費	三、五五〇	二、九二八
事業費	五、〇〇〇	二、〇〇〇
会議費	七六、〇〇〇	八三、〇一四
小集会費	五、〇〇〇	六、七四五
集宴費	一〇、〇〇〇	一一、四〇〇
山日記編集	八、〇〇〇	六、一六〇
図書費	一〇〇、〇〇〇	一〇〇、〇〇〇
会報費	五、〇〇〇	四、一四〇
山岳編集費	一四〇、〇〇〇	一三、八六七
	三六〇、〇〇〇	四九〇、一〇〇
組合費	一五、〇〇〇	一五、〇〇〇
国体費	五〇、〇〇〇	二、九五六
指導費	九、〇〇〇	五、〇八五
調査研究費	五、〇〇〇	〇
渉外費	二〇、〇〇〇	九、六二三
備品費		七、〇〇〇
雑費	六、〇〇〇	三、三五〇
予備費	二五、〇〇〇	三、三八九
図書整備費		一五、〇〇〇
計	二一五、〇〇〇	二三三、八九九
差引剰余金		四九、六四五
計	二一五、〇〇〇	二八三、五四四
（剰余金処理計算書、山岳五十周年発行引当金 四九、六四五 円）		

昭和卅一年度収支予算

（31・3・31）

収入ノ部（単位円）

科目	予算金額
経常収入	
入会金	七四〇、三〇〇
会費	四七、〇〇〇
地方会費	三三四、〇〇〇
前年度未収会費	二三四、〇〇〇
事業収益	一〇七、〇〇〇
会報広告料	五七四、〇〇〇
山岳広告料	四八、〇〇〇
山日記頒布勘定	一〇〇、〇〇〇
会員章勘定	二五、〇〇〇
貸室料	三、〇〇〇
山岳売上勘定	四〇、〇〇〇
雑収入	三〇、〇〇〇
合計	一三四、三〇〇

支出ノ部（単位円）

科目	予算金額
事務費	
俸給手当	二〇、〇〇〇
文具費	一八、〇〇〇
印刷費	九、〇〇〇
通信費	一〇、〇〇〇
交通費	一〇〇、〇〇〇
雑費	三、〇〇〇
管理費	一〇、〇〇〇
諸税	九一、〇〇〇
火災保険料	六、〇〇〇
修繕費	八、一〇〇
光熱費	一〇、〇〇〇
電話料	二五、〇〇〇
消耗費	三八、〇〇〇
雑費	三、〇〇〇
事業費	三、〇〇〇
会議費	九五、〇〇〇
小集会費	五、〇〇〇
集宴会費	一〇、〇〇〇
山日記編集費	五、〇〇〇
図書費	一〇、〇〇〇
会報編集費	五、〇〇〇
山岳編集費	二〇、〇〇〇
山岳編集引当勘定	四七、〇〇〇
組合費	一〇、〇〇〇
国体費	一五、〇〇〇
指導費	〇
調査費	六、〇〇〇
渉外費	三、〇〇〇
雑費	一〇、〇〇〇
備品費	三、〇〇〇
合計	一〇、〇〇〇
	一三四、五〇〇

貸借対照表

（31・3・31）

資産勘定	負債勘定
借方	貸方
勘定科目	
還元財産	一五八、八九一
未払金	七九六、三六六
本年度剰余金	四九、六四五
建物及什器	二四〇、六四〇
建物	七七、六四〇
什器	三五三、〇〇〇
図書	六三九、八〇〇
有価証券	一〇、〇〇〇
銀行預金	一五六、二三二
振替貯金	一八、七二九
郵便貯金	九六〇
遭難対策基金	一〇、〇〇〇
備品	七、二五〇
未収金勘定	四二、八〇〇
現金	一三、四九一
計	二四二七、九〇二
合計	二四二七、九〇二

財産目録（昭和三十一年三月三千一日）貸借対照表に同じ。

社団法人日本山岳会昭和三十年度収支勘定決算書同貸借対照表、財産目録につき監査致しましたところ正確なることを認承致します。

昭和三十一年三月三十一日

会計監事　石原　憲治

附記　二十七年度以来借入金（赤字）により会務運営の一部に充当してきたが、特志会員ならびに役員諸氏のご協力と努力とにより今期でこれを全部返済することが出来た。

二十八年総会において可及的速やかに前記借入金の返済方決議されたが、今期でその決議事項がはたされたわけである。しかしなお会務運営上における会計状態は楽観を許さないものがあり、会費未納者は五百余名に達しているので会員諸氏におかれては必ず会費をご納入下さるようご協力をお願いする次第である。（沼倉）

昭和三十一年四月廿五日發行
東京都千代田區
神田駿河臺四ノ六
發行所　社團法人　日本山岳會
編集者　山崎安治
頒価二十円
電話神田(25)八九五二番
振替口座東京四八二九番
東京都港區赤坂溜池五番地
印刷所　株式会社　技報堂